

PHD LETTER

115

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

2010.12

●夏のスタディツアー報告

「ビショさん農業組合を立ち上げる」

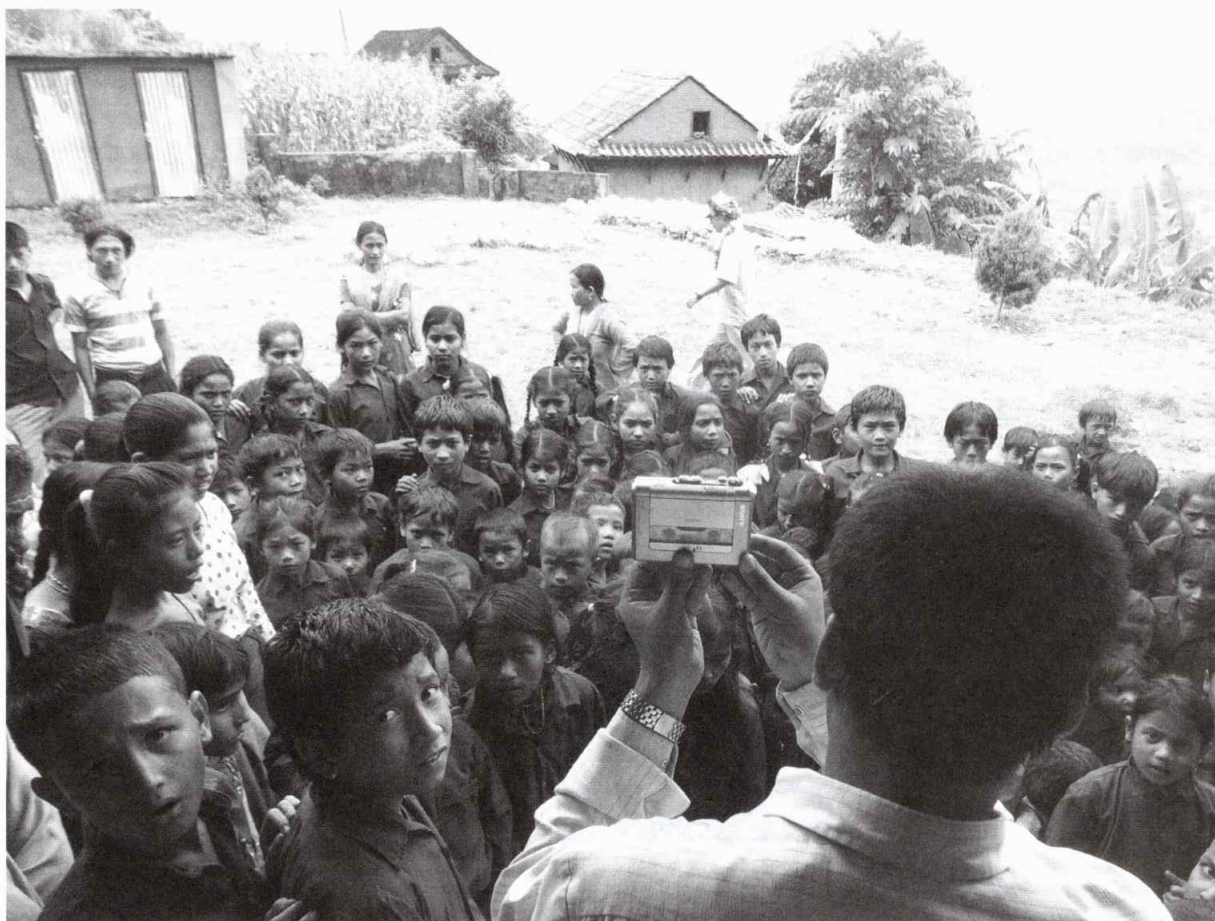
●研修生レポート

「ガハテ村のために」 ミンクマリさんインタビュー

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E-mail: info@phd-kobe.org
URL: http://www.phd-kobe.org
定価：100円
郵便振替口座：財団法人ピー・エイチ・ディー協会
01110-6-29688

PHD協会は特定公益増進法人の認定を受けています。



ネパール カブレ ガハテ村 撮影：FUJINO T.

28期生ミンクマリさんが卒業したセティデビ小学校を、この夏訪ねた。
ミンクマリさんの話を吹き込んだテープを
子どもたちに聞いてもらった。
ネパール語だから、こちらにはわからなかったけれど
何を伝えてくれたんだろう。

東西南北
問題解決
取組日記

思わぬ足止めから

断食月が始まる前に村を出なくては・・・と、今年のスマトラ訪問は8月上旬とあった。バリ島のデンパサールに向かう飛行機が故障のため急遽マニラに着陸。修理のため42時間の思わぬ滞在で到着が遅れ、研修生の村での滞在日程があとだしくなってしまった。不思議なことだが関空発で乗客のほとんどは日本人なのにこの飛行機には日本語を話せる乗務員がおらず、緊急着陸に伴う様々な対処が不十分。成り行きで私も乗務員と他のお客さんとの間の通訳・調整を手伝うことになってしまった。30年のスタディツアー同行経験が多少は役に立ち、それはそれでよかったが。

帰国研修生の
チームワークから

スマトラ訪問の大きな目的はみつ。既に村に戻った研修生のその後の様子を見、助言すること、次年度の研修生の選考をすること、加えて今回は昨年9月のスマトラ沖地震で被害の出た研修生の村に送った支援金がどう生かされているかを見ることだった。前のふたつについては、本号別頁のツアー参加者の報告にもあるように、特筆すべきは、研修の成果があがってくるにはしばらく時間がかかると思われたペリスマンさん(08年度)が、村の道路づくりの先頭にたって、がんばっていたことだった。彼の村、シランジャイからは、彼の他はヘルマさん(07年度)と帰ったばかりのロザさん(09年度)がいる。ヘルマさんは結婚して、今は隣町と行ったり来たりの生活。私たちが期待するPHDの研修生が核となって村人に働きかける形が見えるのは、しばらく先だと思っていた。ところが隣村タベのダスウィルさん(01年度)、アフダールさん(00年度)、ミミさん(02年度)、エリさん(03年度)のチームワークに刺激を受けたのだろうこの成果。とてもうれしくなった。孤立した形での研修生招へいより、お互いに協力しあえる範囲からの招へいの利点はここにある。

次年度研修生の選考は、はじめ予定したタラタダマ村での面接がいまひとつで、研修生と相談の上、これまで招いた村の中で、やや非力であったタラタジャラン村も候補とすることにした。ここは昨年亡くなったプットラさんの村でもある。彼の分の補充という意味も合せ、面接を行った。ふたつの村の選考に集った候補者は7人。その中から、エリザさん(20才、女性)を選んだ。この村からの研修生アルウィさん(01年度)、マスラルさん(05年度)、アフリタさん(04年度)と力を合せてくれることを期待している。

信頼のおける関係が
効果的な支援を

一日かけて移動し、浜辺の村パシバルーへ。到着が夜になったため、震災後の復旧の様子を見るのは翌日に。歩いて村をまわると、学校や村で一番のモスクなど大きな建物はいまだ修復できていない。民家もあちこちに青いシートがかかっているところがみえ、まだまだ復旧途上をうかがわせる。その中で、PHDの支援の場所を訪ねた。

皆さんから寄せられたご寄付の総額は、1,826,403円(2010.9.20現在)、それをアリさん(87年度)と何度も相談をし、4ヵ所で使ってもらっていた。



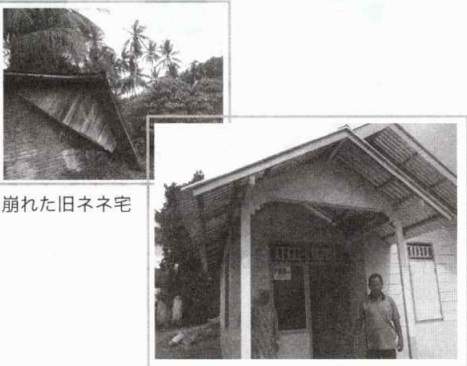
幼稚園では感謝の言葉で迎えられた



モスクの定番、屋根の大きな飾りは次の地震を考え、小さく

まずはプスタナル・ジャンナ幼稚園、砂浜にある建物を訪ねる。今回PHDの支援によるものは、モスクをのぞいて共通の3色のペンキで塗られている。子どもたちと先生40人の歓迎をうけ、お礼をさく。続いて村に4つあるうちのひとつで、サムスアリスさん(90年度)の家の隣のラムノムバクモスクへ。半壊し、修復後もひび割れの跡は残るがもう使える。さらに少し浜から離れたところの一軒の小さな新築の家を訪ねる。ここは村で最も貧しく、一人暮らしの女性ネネ

さん宅。息子さんが一人いるが、彼も暮らしは楽でなく、ネネさんの生活のお世話は近所の人が行っている。村のみんなの合意で、家が全壊した彼女をPHDのお金で支援したいとのことだった。



崩れた旧ネネ宅
新築の玄関で左ネネさん 右アリさん

最後にヤニさん(92年度)も手伝う、この村にもうひとつあるパウド幼稚園の修復の様子をみてきた。いずれもとてもよろこばれている。

PHDは物、金の支援、災害時の緊急支援を一番に行う活動ではないが、村でがんばる研修生の活動によりそう形で、今回のものが生かされていることがみえた。小規模でも村の人たちの意見が反映する形で使われていた。これも研修生との長年のつきあいからの信頼関係によるものだと思う。あらためて皆さんのご協力にお礼を申し上げます。

30年かけて
6人目、7人目が

お盆をはさんで次はネパールへ。こちらも帰った研修生のフォローと次年度の選考を行った。ポカラではラダさん(83年度)、サビトリ・バストーラさん(98年度)に会い、今年もこのグループから手編みのセーター、帽子、靴下を仕入れてきた。数が限られているのでご希望の方はお早目にお問い合わせを。

09年から研修生招へい再開のカブレ郡では、いつものパラトさん(82年度)に加え、この3月に帰ったビショさんが迎えてくれた。彼の試みをもとに、彼に続く人と面接を行い、6人の候補者の中から、ガハテ村のパッサンさん(19歳・女性)とヒングワパティのラメシユさん(25歳・男性)を選んだ。パラトさんが代表を務める団体、サマ・セワ・サムハの活動範囲の人々と力を合せていく人材として、大いに期待したい。

総主事代行 藤野達也



◆グループをつくることの困難さ

『最初は父親と近くに住むギャン・パドゥルさんに話をした。そしたら「とても良い話だなあ。村をよくするぞ」と感触がよかったので、いろんな人に声をかけて集まる場所を持った。でも最初は16人しか集まらなかった。それでは組合はできないと思った。そこで父たちがやっている祭りの時にみんなで集まるグループに話をした。でも、あんまり理解してもらえなかった。そこで、一軒、一軒まわることにした。一度話ただけではわかってもらえなかったけど、何度も話をするうちにだんだんと分かってくれたよ。のべ百軒はまわったよ!』



組合長のギャン・パドゥルさん

帰国後4ヵ月で組合を立ち上げたことには驚きと尊敬の念でいっぱいだ。特に大勢に話をしても伝わらなかったことで

「百軒の家をまわったよ!!」

～ビショさん農業組合を立ち上げる

8月下旬にツアーでネパールを訪問した。最大の驚きはなんと言ってもビショさん(09年度)の農業協同組合の立ち上げの話聞いたことだ。以下、ビショさんの言葉で報告したい。(坂西卓郎)

諦めずに一人一人に根気良く語りかけたことは素晴らしい。「日本での組合の研修が役に立った」とビショさんは教えてくれた。

◆「仕事しやすくなるよ」

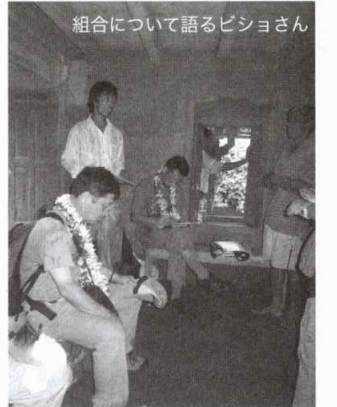
『組合のメンバーは35人。組合登録をした。2週間前にできたばかりだからまだ何も活動はしていない。まずは種や化学肥料、資材の共同購入から始める。例えば化学肥料を個人で購入すると1,650ルピーだが、組合で購入すると1,000ルピーになる。個人ではできなかったことが、組合をつくることで、できるようになる。それが組合を作った目的。』



組合の名前「shree smasthani devi」は神様の名前からとった

目的の話も強く賛同できる。日本での研修は有機農業だったが、いきなり村の人を巻き込んで有機栽培を普及するのは無理がある。それよりも「種が安く買

える」というメリットが見えるほうが巻き込みやすい。ビショさんは「有機農業を広めたい」と日本で語っていたが、理念だけでなく柔軟性をもって取り組もうとしている。



組合について語るビショさん

◆組合のこれから

『まだ売ることは考えていない。その係の件費が払えないから。でも将来は組合でお店をやりたい。農作物を中心に生活必需品、塩や砂糖を売りたい。』

上記のような夢を語ってくれた。また「ミンクマリさんにも組合を手伝って欲しい。EM菌や連作障害のこと、お金のことを勉強して、助けて欲しい」とメッセージをくれた。



ソディの活動に
参加して

4月から7月までの3ヶ月間ソディの活動に加わり、大学内で布の紹介、販売をすることを通じ、非常に貴重な経験をすることができました。自分たちで企画し実行していく、「用意されていて当たり前」ではない環境に試行錯誤しながらもどうにかやり終えることができました。様々な人の手助けによりできたことだと思います。

また、昼休みに2度実施したワークショップにおいては、質問されてもうまく伝えられない、分からないことも沢山あり、勉強不足を実感し、もっと学ばなければとも思いました。

フェアトレードを調べていても新たな疑問が浮かんでき、どうすべきか、また何ができるのかと、今後も学んでいきたいと思っています。

この活動は自己満足だけで終わるものではないと思います。海の向こうにいる生産者の皆さん、こちらで広めていく人たちの信頼関係がなければ決

して出来るものではないと実感しました。これからも自分に出来ることを一所懸命に頑張りながら様々なことを学んでいきたいと思っています。

(利崇麻紀・関西国際大学2年)

草木染め布の説明をし、販売する利さん(中央)



夏のスタディツアー報告

インドネシア
7月31日～8月8日

関空発の航空機は、故障のためマニラに不時着し、藤野さんの大活躍があったもののインドネシア着は42時間遅れて始まることになった。その上タラタダマ村から迎える予定の研修生候補が十分に集まらず、急遽タラタジャラン村でも選考するというあわただしさだった。けれど、研修生たちのチームワークと使命感に変わりはなかった。昨年急逝したプットラさん（06年度）のご家族の心の中ははかりしれない



タラタジャラン村での選考の様子

が、研修生たちの活動に、プットラさんの願いも生かされていくだろうと思われた。昨年大地震に見舞われたパシルパルー村では、PHD協会の支援で幼稚園やモスク等が再建されていた。西スマトラのムスリムの暮らしを目の当たりにし、アジア太平洋戦争の被害者のお話を聞くことができて、私はとても感謝している。（金山顕子・教員）

ネパール

8月18日～27日

私は今夏、勤務先の生活協同組合コープこうべからの派遣としてスタディツアーに参加しました。正直に言えば、ネパールについての知識もなく、国際協力、交流についても全くの素人でした。今回の訪問では、現地で協同組合についてレクチャーするという役割もあり、事前準備も手探りで進めていきました。ネパールは経済的に発展途上ですが、人と人とのつながり、心の豊

してはこれといってしていなかった。今は農業グループを作り、また道をよくする仕事をしている。村の人たちと一緒にできるのでとても楽しい。」と話してくれました。



道の工事は村人みんなで

シランジャイ村は、山の斜面に位置していて、田んぼはとても小さな棚田で、石がごろごろしているため農業はとても大変です。まだ電気もなく、タランバブンゴの中でもとても貧しい村のひとつです。そんな中で、彼はこんなことも言いました。「お金持ちにはなりたくない。お金持ちになったら、ものをたくさん持つようになる。すると、ものを手放したくないから、いつもそのことばかり考えるようになる。

かな国で、一番驚いたのは、昨年の研修生ピショさんが日本で協同組合について学んだことをもとに、現地に帰って3ヶ月で協同組合を設立していた事です。通訳の方を交えた2回のレクチャーでも協同組合について、多くの質問がありました。特に印象に残ったのは、長くみんなで協同組合を続けて行きたいという思いでした。ぜひ今後もネパールの協同組合を支援していきたいです。

（吉田宜子・生活協同組合コープこうべ）



協同組合についてレクチャーを行う吉田さん

子どもには勉強はたくさんして欲しい。でも仕事は自分がしたいことをすればいい。農業でもいいし、先生でもいい。」決して物質的、金銭的な豊かさだけを追うのではない生活がありました。

シランジャイにはもう一人帰国した研修生ロザさん（09年度）がいます。彼女は帰国してすぐ、足踏みミシンを買って、少しずつ近所の人相手に服を作っています。



ミシンで服づくりに励むロザさん

このシランジャイ村の2人だけでなく、PHDの活動が、研修生ひとりひとり、そしてそこから村へと、とてもいい変化を与えているなぁと感じました。

（日下部卓・大学院生）



インターン受け入れ



ネパールの毛糸製品の値札付け

今年の夏も佛教大学から2名のインターンを受け入れました。延べ10日間の活動期間中、研修生の日本語学習、事務手伝い、セミナー補助など幅広く業務に携わりました。

PHD協会でのインターンは新しい出会い・発見の連続でした。研修生とかかわっていく中で、今までの私はいかに何も考えずに生活していたかというのを考えさせられました。自分自身の問題にしても身の回りの社会問題にしても、正直深く考えないようにしていた部分がありました。しかし、私と同年代または私より若い研修生が村のために頑張っている姿を見て、もっとしっかり考えなくては、目をそらしてはいけないんだと思うようになりました。また、カレンのお話もたくさん聞かせていただきました。カレンの始まりやソディの成り立ちの話聞いて、PHDからの発案ではなく、どれも研修生やボランティアさんからのやりたい！という声から始まったと聞き、とても素敵だなと思いました。たくさんの経験を本当にありがとうございました。 佐藤みずほ

PHD協会がインターンシップをさせていただき、NPO・NGOのことや国際協力について学びました。その中で相手を思いやることの難しさや、一つの活動を行うためにはPHD協会の中だけでなく、ボランティアの方々や研修生の村の方々、他団体の方々など、たくさんの人々との繋がりの上でなっていること、またその繋がりが次々に連鎖をして、新しい活動や繋がりになっていくのだということを実感し、何事にも信頼関係が大切なのだということ学ぶことができました。また、自分は今まで物事に関して「思う」だけで考えたり行動に起こしたりすることがなかったという事にも気づくことができました。これからはPHD協会でも学んだ事、そして出会いを大切に、そして人生をどう生きるかということに生かして考えて生きていきたいと思います。 永田遥香

PHDのつどい第1回「草の根交流～ネパールと共に学ぶ」



PHD活動をされている方々を話し手として招き、参加者と語る「PHDのつどい」。第1回は、PHDと連携しネパールの村づくりの活動をされている篠山ナマステ会の事務局長の小嶋英毅さんのお話を伺いました。ナマステ会が支援してきたセティ・ディビ小学校の卒業生のミンクマリさんも一緒に参加しました。小学生の頃のミンクマリさんが写っている写真もあり、歴史や繋がりを感じる会でした。

夏のスタディツアー合同報告会



インドネシア、ネパールの夏のスタディツアーの合同の報告会を、神戸で行いました。ツアー参加者15人が集まり、それぞれのツアーの様子をスライドで紹介しました。研修生のインドラさんとミンクマリさんも加わり、村についての質問も交えながら、参加者が感じたことを共有できた会となりました。

岡山YMCAでの交流会



急な告知にも関わらず、13名の方にお集まりいただき、ウルミラさんが村の様子やお産の事情についてお話ししました。ネパールと日本での避妊方法の違いや、水牛や人の糞尿で作ったバイオガスを使って煮炊きしているところに、関心が集まりました。ウルミラさんの作ったネパール料理も好評で、あっという間の2時間でした。

インドネシア滞在記



スタディツアーの後、2週間村に残り、帰国した研修生とその家族の人たちの生活と活動の様子を見てきました。

西スマトラ州の山間部タランバブンゴという町にある3つの村で、帰国した研修生11人が村のために頑張っています。郡の役場に助成を申請し、材料を買い、村人の労働奉仕で幼稚園を建てたり、灌漑設備、道路、水道、電気を整備をするなど、中心となって活躍しています。

■ペリスマンさん、頑張る！

シランジャイ村にいるペリスマンさん（08年度）は、村の中心を走る長い坂道の舗装工事をとりまとめていました。「日本に行く前は、一人で大工と農業をするだけで、村全体のことに

- | | |
|---------------------------------------|-----------------------------------|
| 6月19日 関西セミナーハウス 開発教育セミナー | 9月 4日 岡山交流会 |
| 6月25日 阪神シニアカレッジ講義「NGOの活動」 | 9月11日 PHD島根交流会 |
| 7月 5日 神戸大学講義「NGOの活動」 | 9月16日 帝塚山学院大学講義 |
| 7月 5日 コープこうべ労働組合講演 | 9月18日 夏のスタディツアー報告会 |
| 7月10日 加東市連合婦人会研修生報告会 | 9月18日 PHDのつどい第1回「草の根交流～ネパールと共に学ぶ」 |
| 7月11日 佛教大学 インターンシップ事前研修「社会における私の役割」 | 9月24日 常翔啓光学園交流会 |
| 7月31日～8月8日 インドネシア・スタディツアー | 9月29日 国際ソロプチミスト高山交流会、PHDひだ友の会交流会 |
| 7月31日 しあわせの村夏祭りバザー | 10月 9日 神戸市シルバーカレッジ学園祭 |
| 8月10日、11日 多文化共生のための国際理解・開発教育セミナー | 10月16日 神戸女子大学公開フォーラム |
| 8月18日～27日 ネパール・スタディツアー | 「地球市民として多様な参加を求めて」 |
| 8月22日～28日 One Village One Earth「PHD展」 | 10月21日 佛教大学講義 |

第29期研修生 ホストファミリー募集



パッサン・ラマ
ネパール・19歳・女性



ラメシュ・カジ・シュレスタ
ネパール・25歳・男性



エリザ・フィトリ
インドネシア・20歳・女性

期間
経費

2011年4月中旬～2012年3月初旬

当会の規定により、食費と滞在費をお支払いいたします。

応募条件

その他、交通費、医療費などは基本的に当会が負担します。
当会事務所から公共の交通機関で1時間以内で通える範囲。

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

2010年	6月	49件	¥ 690,569
	7月	409件	¥2,531,533
	8月	152件	¥2,576,600
	9月	106件	¥3,733,415
		716件	¥9,532,117

上記の通り多くの皆様より貴重なご浄財を賜りました。経済状況がなかなか好転しない中ですが、日本労働組合総連合会「愛のキャンパ」をはじめ、皆様のご協力に感謝を申し上げます。今年度も年末募金が始まります。研修事業の更なる発展を目指し、引き続きの力強いご支援をお願い申し上げます。

◆"研修生と学ぶ"国内スタディツアー in 水俣

今年の国内問題を考える勉強会は、西日本研修旅行で訪問する水俣で行います。3人の研修生とともに水俣病とその地域再生について学びます。

日程：2011年1月8日～11日（現地集合）

参加費：35,000円

◆新企画「地元学実践 in インドネシア」

職員坂西卓郎が「地元学」という手法を用いた、スタディツアーを担当します。スマトラの山村で「当たり前にあるもの」を探しませんか？

日程：2011年3月17日～26日（8泊9日）

参加費：既会員 215,000円

新規会員220,000円

+会費 5,000円

事前説明会・勉強会：2011年3月12日

◆「PHDのつどい」はあと2回

第2回「地域に根ざしたPHD運動」

日時：12月4日（土）16：00～18：00

話し手：丸山悦司さん、陽子さん

第3回「岩村ドクターとPHD運動をみつめて」

日時：2011年3月19日（土）16：00～18：00

話し手：岩村史子さん

参加費：各700円（お茶、お菓子付き）

場所：PHD協会事務所

◆タイ・スタディツアー報告会

年末年始のタイ・スタディツアー一報告会を行います。タイの村の生活、研修生の様子、布グループの活動などを撮りためたの写真を通してご紹介します。

日時：2011年1月29日（土）14：00～15：00

場所：PHD協会事務所

◆西日本研修旅行は、1月6日開始

1月中旬、約2週間研修生が西日本各地を訪ねます。各地で学ばせていただくとともに、交流の会ももちます。詳細は、ホームページをご覧ください。

宮崎～鹿児島～熊本～福岡～山口
～広島～岡山

使用済み切手、書き損じの年賀状のご協力をお願いします！

多くの皆さまから集められ、事務所ボランティアさんによって整理され、換金された切手は9月末までで約10万円となりました。ありがとうございました。

これからもPHD活動資金として使用済み切手は必要です。より一層のご支援をお願いいたします。

また、年賀状の季節となりました。例年に引き続き書き損じ葉書も合わせてご協力ください。

◆自転車1台ご寄附いただけませんか？

何代目かのPHD号。長年愛用させていただきましたが、サドルが取れるなど、寿命を迎えつつあります。PHD事務所の近隣の方で、自転車をご寄附下さる方いらっしゃいませんか。

◆A4裏紙ありませんか？

節約につとめるPHD事務所。裏紙で十分な場面が多々あります。A4の裏紙がありましたら、お譲りください。

〇月×日のPHD協会

— 研修生とのできごと

職員 川原 インド映画の話で取入ろうかと、人気俳優S・カーンってカッコイイと話しかけるも、ミンクマリさんに「あっそう」と軽くあしらわれる。

職員 坂西 前号で表明の夫婦による助産研修支援計画が現実。ただしウルミラさんにとりあげてもらうには日が合わない。妻、ネパールで出産か。

国内研修生 松田 ウルミラさんの滞在家中に急遽泊まらせてもらうことに。限られた広さに雑魚寝となるも、ネパールではこんな普通よ、と楽しく。

国内研修生 鶴谷 農家で一緒に研修中、ご夫婦のやりとりを聞いていたインドラさんから「お母さんはオイさんなの？」と聞かれ、説明に苦勞する。

職員 藤野 ミンクマリさんとバスで高山へ。5時間の道中、15歳の弟のカトマンズへの家出話をきく。理由はさておき、旺盛な自立心に感心する。

職員 佐々木 インドラさんのロータリークラブ例会出席に同伴。スピーチ頑張ると励ますと「そんなのしたことない」と困らせる。これ毎度の台詞。

（産まれたとき、重かった順）

制作協力：菅原宗晋 増本一朗 日野ひとみ

—再生紙を使用しています。